寄り添い、寄り添われる関係

皆さんは、「信仰」と言うとどのようなことだと思いますか。きっとこれには、色々な答えがあることだと思います。一言で言えば「神様を信じること」なのでしょうが、その意味合いは実に様々です。絶対者の存在を信じる、その宗教の教えや信条を信じるといったbelieveの段階、さらにその応答として、それにふさわしくふるまうといったbehaveの段階、もっと進んで宗教共同体に所属するといったbelongの段階と、信仰というものを三段階で捉える考え方などもあります。このように一口に「信仰」と言っても、その意味するところと言いますか、イメージするところは人によって様々でしょう。今日は聖書の御言葉からこの「信仰って何」という問題について、一つの答えを考えてみたいと思います。

さて先ほどお読みいただきました聖書個所は、ヨハネによる福音書9:13～41です。ずいぶん長い聖書個所でしたので司会の方が大変だったと思いますが、このお話は9:1～12 でイエス様が生まれつき目の見えない人を癒されたところから始まっていきます。

ちょっと9：1から聖書を見ていきましょう。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか」という弟子たちの言葉に言い表されているように、当時、病気や障がいというのはその人、あるいはその人の先祖などが罪を犯して、その裁きとして神様に罰されて起こると考えられていました。そのために、この生まれつき目の見えない人は「罪人」として差別され、社会から追いやられて物乞いをせざるを得ない状況に追いやられていたのです。

これを見たイエス様は弟子たちの問いに対し、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」と仰って、この生まれつき目の見えない人を癒されました。

8 節からはこの癒しの奇跡を目の当たりにした人々の反応が記されているわけですが、どうでしょうか。私は今回、イエス様が病気を癒されたこと、その奇跡的な力よりもむしろそちらの方に焦点を当てて聖書のメッセージを考えてみたいと思うのです。

そもそも弟子たちの「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか」という問いも、この盲人自身の存在を無視した議論と言いますか、この人に寄り添う気持ちのない、まったく冷たい神学的な議論だったと思います。そしてこの人が癒されたことを知ったユダヤ人たちは本人を取り囲んで議論をし始めるわけですが、そこでも誰もこの人に寄り添う気持ちを見せないのです。

まず「近所の人々」やこの目の見えない人が「物乞いをしていたのを前に見ていた人々」は、今目が見えているこの人が本当に以前目が見えず、「座って物乞いをしていた人」か、そうでないのかを論じ合います。本人が「わたしがそうなのです」と言っても、誰も「良かったな」と癒された喜びを共にしようともしない、「お前の目はどのようにして開いたのか」、「イエスという人が癒したというなら、その人はどこにいるのか」と尋ねるばかりです。そして人々はファリサイ派の人々の所へこの人を連れて行くわけですが、彼らはこの人が癒されたことよりも、安息日の労働を問題にし始めます。呼び出された両親は自分の子どもの目が治ったことを喜ぶよりも、自分に降りかかった火の粉を払うことを優先させる。変にイエス様をメシアと言い表して会堂から追放されることになればかなわない、迫害されることになればかなわないというわけです。結局ユダヤ人たちはイエス様に目を癒していただいた人をもう一度呼び出しますが、それはこの人から言質を取って、イエス様を陥れる手段として利用するためにすぎませんでした。誰もこの人の悲しみや喜びに寄り添おうとしないのです。

生まれながらの目の障がいが癒されても、この人は誰からも寄り添われず、親からも見放されて、「外に追い出」されたままでした。そんなこの人にイエス様が再びやって来て、「あなたは人の子を信じるか」、私がその人だと、信仰に、御自分との交わりに招かれるのです。

私は思います。この癒された人はその後どのような生涯を送ったことだろうと。あまり聖書に書かれていないことを勝手に想像してものを言うと、えらい神学者の先生に怒られるのかもしれませんが、私は人間不信に陥りそうな不安や孤独をもイエス様に救ってもらったこの人は、その痛みや辛さを知っている者として、イエス様の愛のもと同じような辛さを抱えた人と寄り添って生きていったと思うのです。

今日の聖書個所から教えられること、それは信仰とはイエス様との交わりに招き入れられること、そしてその愛のもとで人に寄り添い、寄り添われる関係に招かれることだということに他なりません。

ここで私たちの社会を振り返ってみれば、そこには誰からも寄り添われることなく「外に追い出」されてしまっている人々がたくさんいます。先日、少し風邪気味だったので、薬局に薬をある程度まとめ買いしてストックしておこうと買いに行ったら、市販薬は一箱しか売ってくれませんでした。それも何の目的で買うか尋ねられたのですが、その時に思い出したのがトー横キッズと言われる子どもたちです。虐待やいじめなどを受け、学校や家庭に居場所がなくて孤独感、寂しさを抱え、歌舞伎町のトー横と言われるところに集まってくる、そして心を病んでオーバードーズに走る子どもたちの衝撃的なニュースの映像を思い出しました。おそらくオーバードーズを防ぐ対策として、この府中の薬局でもそのように対応していたのでしょう。けれどもそれだけでなく、子どもたちを追い詰めるいじめや虐待といった社会問題にきちんと対処していくこと、また学校や家庭に居場所がない子どもたちの受け皿を整えたり、子どもたちの心のケアをしっかりと行ったりしていくことが同時並行で為されないといけないことを思わされました。

私たちの社会に溢れる孤独の問題は深刻です。「自分は誰からも愛されていない」と感じてしまうこと、これ以上に大きな苦しみはありません。この苦しみのゆえに、時には「自分は生まれてこない方が良かった」と考えてしまうことすら起こります。そのような孤独の溢れるこの社会のただ中で、私たちはイエス様の愛を光り輝かせてい

かなければなりません。イエス様は皆を御自分のもとに招いておられる。そして御自分の愛のもとで人と温かく寄り添い、寄り添われる関係に招いておられる。この福音のメッセージを光り輝かせていかなければなりません。

願わくは私たち、この府中の地で自分がイエス様に招かれたように、たくさんの人を教会に招いていくことができますように。イエス様の愛のもとで温かく寄り添い、寄り添われる関係の輪をどこまでも広げていきたいと願います。そしてこの教会をすべての人の居場所として開放していきたいと願います。信仰とはイエス様との交わりに招き入れられること、そしてその愛のもとで人に寄り添い、寄り添われる関係に招かれること。その関係の中で、「あなたは生まれてきてよかったんだよ。愛されているよ。ひとりぼっちじゃないんだよ」、このメッセージを一人でも多くの方に皆で一緒に届けて参りましょう。

お祈りをいたします。　――以下、祈祷――